

## ネット社会における「読む」という行為の変容 ——メディアの差異性とテキストの同一性をめぐって

前納 弘武\*

### 要 約

本稿は、今日のネット社会における「読む」という行為の変容を、メディアの差異性とテキストの同一性という現象に着目する観点から論じている。今日では、活字文字を「読む」よりもデジタル文字を「読む」方が多くなってきたが、その場合のメディアの媒介作用を考察していくと、情報の意味論的内容を問題視する〈情報の次元〉よりも、その情報を伝達する様式の提示としての〈伝達の次元〉にこそ分析の鍵があることが分かる。その点について、R. シャルチエほか、N. ルーマン、ならびに、W-J. オング等の議論を検討していくと、いずれも「伝達次元の一次的性格」を重視しており、学問的立場や専門領域の異なる3者ではあるが、人間のコミュニケーションに関する基本的な視点においては共有する部分も少なくないことが明らかとなった。

### 序

今日のネット社会における「読む」という行為について考えてみたい。以下の考察において、「読む」という行為とは、主に、極日常的に誰もがやっている何らかの文字を「読む」という行為を指す。すなわち、新聞を読んだり、雑誌を読んだり、書物を読んだり、つまりはある種の媒体によって表現された文字を「読む」という行為が、本稿で取り上げる直接の考察の対象である。日本語の「読む」という言葉の意味については多様な用法があるが<sup>1)</sup>、そのうち「文字」を「読む」という行為が、今日、急速に変容しつつあるというのが筆者の基本認識である。その変容とはどのような形で進行しつつあるのか、そこで起こりつつ

ある問題としてはどのような事柄に注目すべきなのか、変容の帰結にはどのような問題が想定されるのか。

こうした問題領域に関して、W-J. オングは、メディアの表現形式の差異は人びとの認識のあり方や思考過程をも規定するという観点から、「声の文化」から「文字の文化」への移行がもたらした社会変容を説いたが<sup>2)</sup>、オングの聲に倣えば、ネット社会における「読む」という行為の変容は、どのような影響を社会や人間に及ぼすものであろうか。

かかる主題を考察するに際し、まずは「読む」という行為の変容をめぐるとの具体的な事象をイメージすることから始めよう。

---

\*社会情報学部社会生活情報学専攻

## 1. 文字テキストの多様化

「読む」という行為の変容をめぐって、その具体的事象の一つとして指摘すべきは、新聞や雑誌や書物という旧来の印刷媒体に刻印された文字のほかに、それとは全く異なった性質をもつ文字を「読む」という行為の出現である。言うまでもなく、電子メディアのなかに表現された（「書き込まれた」と言うべきか？）文字を「読む」場合がそれである。旧来の印刷媒体によって表わされる文字と新しく登場した電子媒体が表現する文字、この2つの文字類型に関し、以下では便宜的に、前者を「活字文字」、後者を「デジタル文字」と呼ぶことにする。もちろんこの他に、後にも言及する「手書き文字」が存するが、ネット社会の進展の結果、今や「手書き文字」を「読む」機会は極度に減少し、さらに、活字文字から成るテキストよりもデジタル文字から成るテキストを「読む」方が多い人も少なくないであろう。

実際、日々のニュースに接するにしても、紙媒体たる新聞を「読む」よりも電子媒体によってニュースを「読む」傾向が目立つ昨今である。そのため、新聞企業の存立さえおびやかされているのは周知のところであるが、報道各社のホームページが提供するニュース情報以外に、近年、普及し始めた電子ブックで「読む」エッセイや小説、企業や大学等各種事業体の公式ホームページ、そして、毎日の業務遂行に欠かせない電子メールの文字等々、筆者の場合、デジタル文字を読まされる時間は一日24時間のうちかなりの量に上るといってよい。

これら公式ホームページから、個人的ないしは社会的にやりとりするメールやブログのデジタル文字、さらに昨今のツイッター等々にまで目を広げて、そこに登場するテキストに書き込まれた文章が提示する「文体」に注目すると、次のような見逃しがたい特徴を指摘しないわけにはいかない。というのは、周知のように、文字のみならず絵文字や顔文字や記号文字を多用した多彩なヴァリエーションのメッセージが行き交い、旧来の活字文字のテキストを「読む」ことに慣れてきた活

字人間にとっては到底真似できそうもない口語的文体がネット空間に充満している。

もちろん、多くのデジタル文字は伝統的な「書き言葉」で表現されるケースが多い。しかし、極親しい間柄で交わされる絵文字や顔文字、各種記号文字等々を用いたメールやブログ等に見る文体は、「書き言葉」というよりも「話し言葉」に近く、同じデジタル文字とは言っても、報道機関が提供するニュース情報の文体や企業各社の公式ホームページに表れるテキストの文体とは明らかに異質である。

つまり、今日のネット社会において、文字テキストを「読む」という行為は、「手書き文字」を除いて大別すれば、活字文字を「読む」か、デジタル文字を「読む」かのいずれかということになり、さらに、後者のデジタル文字を「読む」場合は、その文体の側面からみて、「書き言葉」主体のテキストを「読む」か、それとも、「話し言葉」主体のテキストを「読む」か、そのいずれかということになる。前者の「書き言葉」主体のテキストは、デジタル文字とは言っても、文体の側面からみればほとんど活字文字の延長上で対応することができる。そこに提示される文体は「書き言葉」中心であるから、言わば、「書かれることを前提として書かれた文体」と捉えることができる。それゆえ、これらの文字群を、ここでは、「書かれるべくして書かれた文体」という表現で括っておくことにしたい。

後者の文字群、すなわち、「話し言葉」主体の文字群から成るテキストの場合はどうであろうか。これらの文字を「読む」という行為の地平からみると、最近流行のツイッターという言葉の原義がそうであるように、まさに「話すように」、または、「つぶやかれた」内容がそのまま文字に写されたかの如くにみえるメッセージ（テキスト）が多い。「読む」という行為の観点からみると、話された内容そのものが直ちに文字に移し替えられた文章を「読む」という展開になる。したがって、これらの「話し言葉」主体の文字群については、さしあたり、「語るようにして書かれた文体」という括りで捉えておくことにしたい。

とりわけ、現代の若者のコミュニケーション空間に頻繁にみられる、この種の「語るようにして書かれた文体」の群れは、文字それ自体の特質ではない。ことばをも含む諸々の記号を駆使して表現される文章、いわばその文章の文体をめぐる個人の好みという色彩が濃い。その意味では、ロラン・バルトのいうスタイルの概念に近い<sup>3)</sup>。バルトに即して言うなら、同一のラングで表現された文字でありながら、書き手の個人的な好みとしてのスタイル（文体）丸出しの文字群が、ここにいう「語るようにして書かれた文体」とみなすことができる。

今日のネット社会における文字は、メディアの差異からみると、活字文字とデジタル文字の2類型、実際にそれらの文字を用いて表現される文章の文体（スタイル）からみると、「書かれるべくして書かれた文体」と「語るようにして書かれた文体」の2つの類型を生み出しているわけである。このそれぞれ2つの類型を、メディアの差異とスタイルの差異を両軸とした4つの象限に整理すると、今日のネット社会における「読む」という行為を成立せしめる文字テキストの類型は【図1】のとおりとなる。

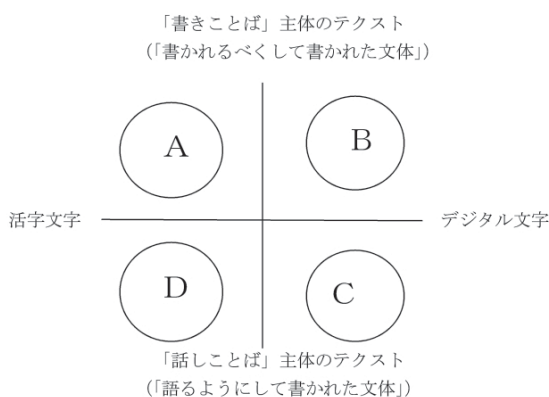
図において、メディアの差異として設定した横軸の区分は、文字が刻印される媒体の技術的な差異にもとづく区分であり、他方、スタイルの差異を示す縦軸の区分は、あるメディアを諸個人がどのように利用するかという側面、メディア技術を

実際に体験するときに利用者独特のスタイルが反映される側面での区分である。それゆえ、ネット社会における「読む」という行為は、【図1】に提示したA/B/C/D4つのテキストタイプのいずれかを「読む」ことから成り立っていると考えることができる。

活字文字全盛のひと昔前の時代・社会においては、専ら「書きことば」主体のテキストを「読む」という行為、すなわち、〈象限A〉に属する文字を「読む」という行為が中心であった。当時、「話しことば」主体のテキスト（シナリオのようなもの？）つまり〈象限D〉もないではなかったであろうが、活字媒体として、そこに刻印される文字から成るテキストはやはり新聞や書物にみる「書きことば」主体が大勢であった。そのようなテキストの特質を、先には、「書かれるべくして書かれた文体」と呼んだ。しかるに今日のネット社会においては、活字文字の他にデジタル文字から成るテキストの出現をみた。それも、「書きことば」主体の〈象限B〉のテキストのほか、さまざまな意匠、さまざまなスタイルから成るテキスト（メッセージ）を含む〈象限C〉が出現することになった。そこにみられる特質を捉えて、「語るようにして書かれた文体」と呼んだわけである。

## 2. メディアの差異性とテキストの同一性

さてそこで、4つの文字テキストの類型を踏まえて、今日のネット社会における「読む」という行為を特徴づけている傾向とは何であろうか。その代表的な事象としては、何よりも、メディアの多様化の結果、同じテキストを異なったメディアによって「読む」という行為が日常化した事実を挙げないわけにはいかない。その具体的な事例としては、新聞という活字メディアで報道されたニュースを電子メディアによるデジタル文字の形で「読む」ことが可能になった点にある。ある日の新聞で読んだニュースが、その日に、当該新聞社のサイトでテキストの同一性を維持しながら掲載されている。そこに、メディアの差異性とテ



【図1】 ネット社会における文字テキストの類型

クストの同一性というべき一つの社会現象が成り立っているわけである。

他に、この種の事例としては、活字文字で単行本として刊行された小説やエッセイのその同じ内容の作品を電子ブックで「読む」ことができるようになったことも挙げることができる。電子ブックの普及は、今後、日本でも急速に進んでいくであろうが、こうしたメディアの差異性とテキストの同一性という事実は、ネット社会以前にはほとんど社会現象として問題にならなかったといっ

てよい。とりわけ、前者のニュースの受容行動の場合、特に現代の若年層では、各種調査結果が示すように、ネットによるニュースの受容が新聞に取って代わる勢いで浸透している<sup>4)</sup>。【図1】に沿って言えば、〈象限A〉のテキスト（新聞のニュース）と〈象限B〉のテキスト（ネットニュース）の内容的な同一性が日常化し、その利便性ゆえに、〈象限B〉のテキストを「読む」という行為が蔓延しつつあるわけである。実際、ネットニュースを「読む」人びとは若年層のみならず確実に増大しており、電子ブックの浸透も同じような現象ともみなされる。ただ、現在のところ、その影響力の大きさと言う点においては、ネットニュースの読者層の拡大は電子ブックの比ではない。メディアの差異性とテキストの同一性という現象としては、新聞ニュースとネットニュースの場合においてその代表的かつ典型的な事例として位置づけることができる<sup>5)</sup>。

そこで、ネット社会におけるニュースの受容行動を念頭におきつつ、ということは、先の【図1】が示す〈象限A〉と〈象限B〉のテキスト類型を踏まえつつ、メディアの差異性とテキストの同一性の問題を考察するとすれば、そもそも、ニュースを「読む」ときのメディアの差異は、その直後に起生する受け手の内的作用、つまり、ニュース・テキストの意味解釈の側面においてはどのような差異が生じるものであろうか。いかなるメディアでニュースを受け取っても、一人の受け手にとってニュースはニュースに違いないが、そもそも、人々がニュースを受容するときに用い

るメディアの差異は、そのニュースの意味を解釈する受け手の内的作用に対して、何らかの差異を生じるものではないであろうか。それとも、どのようなメディアからニュースを手に入れても、受け手の内的作用には何らの差異も生じないものであろうか。

この問題は、情報が何らかのメディアによって伝えられた場合に、受け手が利用するメディアによって意味解釈の作用はどのように異なるのかという問題、つまりは、あるテキストを伝えるメディアの媒介作用の問題、換言すれば、テキストの同一性とメディアの差異性は人びとにどのような変容をもたらすのかという問題になる。無論、この問題は、ニュース・テキストだけに関わる問題ではない。先にも触れたように、活字文字による書物と電子ブックの関係においても同様の問題を抱えている。さらに、活字文字による書物に絞ってみても、単行本と文庫本との関係においても同様である。ただ、今日のネット社会における顕著な現象としては、活字文字でニュースを「読む」という行為とデジタル文字でニュースを「読む」という行為の比較において、より鮮明に、メディアの差異性とテキストの同一性が孕む問題性が浮かび上がってくると思われる。

### 3. 「形態が意味を生む」

活字文字でニュースを「読む」場合と、デジタル文字でニュースを「読む」場合のメディアの媒介作用、受け手の側から言えば、「読む」者の内的作用ないし意味解釈過程においてはどのようなメカニズムが生じると考えることができるのであろうか。この問題の解明にあたって、貴重な分析視点を提供しているのは、書物を中心とした「読み」の歴史学の分野でユニークな成果を残してきたロジェ・シャルチエの議論である。シャルチエが主に論じてきたのは書物を「読む」という行為であり、ここで議論の俎上におく新聞を「読む」という行為とは、テキストの制作過程、制作されたテキストの特徴など質的に異なる点も多く比較になり難いという見方もある。しかしこの点につ



いては、ミシェル・ド・セルトーの次の言を引いておこう。

セルトーは、新聞も書物もいずれも活字メディアであり、両者の共通性に関して、「新聞であろうとブルーストだろうと、テキストはそれを読む者がいなければ意味をなさない。テキストは読み手とともに変化していく。テキストは、自分のあずかり知らぬ知覚のコードにしたがって秩序づけられるのである。テキストは読み手という外部との関係を結んではじめてテキスト」<sup>6)</sup>になると述べている。新聞も書物も、そこに提示されたテキストは読み手との関係、換言すれば、読者の「読む」という行為のなかではじめてテキストとしての位置づけを獲得するというのである。その意味では、活字文字であっても、デジタル文字であっても、書かれたものを「読む」という行為のあり様は、いずれにも共通した論点が内在するといえよう。そうした前提的な問題を念頭におきつつ、シャルチエが「読む」という行為に関して指摘するところを整理すれば、概略、次の通りである。

シャルチエにとって、「読む」という行為の対象化は、セルトーの立場と同じく、「テキストの世界」と「読者の世界」の出会いのあり方への注目を意味するものである。そして今日まで、両者の出会いとしての読書行為の研究は、次の2つの公準によって導かれてきた。「第1は、本を読む過程で実現される意味の創出作用を、時・所・集団によってその様態や形式が異なる過程、つまりは歴史的に決定される過程と見なすこと。第2には、あるテキストの多様で流動的な意味作用は、そのテキストが、読み手（あるいは聴き手）によって受けとめられるさいの形式、ないしは形態に依存していると考えることである」<sup>7)</sup>。

この2つの公準に関して、敷衍すれば、第1の公準に関しては、実際に、読み手は、「物質性をまったく奪い取られた抽象的、理念的なテキストと向きあっているわけでは、決してない。かれらは、書物など具体的なものを手にするのであって、それらのもののつくられ方が、かれらの読む行為、ひいては読まれるテキストの捉え方、理解の仕方を、規定している」のであって、「文字の

うえでは安定しているかに見えるテキストも、読まれるためにそのテキストを提供している印刷物の仕掛けが変わるとき、思いがけない意味作用やステータスを身におびてくる」と述べる<sup>8)</sup>。

この点について、さらにシャルチエは、文学研究にありがちなテキストの位置づけ、すなわち、テキストはあらゆる物質性とは別個にそれ自体として存在するという見解を退け、「(テキストの)形態は意味を産出するものであり、テキストは字句が不変であっても、それを解釈の対象となるように提示する装置が変わると、まったく新しい意味と身分を付与されるものであると見なければならぬ。」と指摘する<sup>9)</sup>。さらに、シャルチエ編による『書物から読書へ』においては、「テキストの意味は、それがどのような種類のものであろうと、そのテキストに対してなされる読み方の相違によってさまざまな相貌を呈しうる」という立場をより鮮明にしている<sup>10)</sup>。

すなわち、ほとんど同じ、いやまったく同じ内容のニュース・テキストであっても、新聞というメディアで「読む」場合と、電子メディアで「読む」場合とでは、そのテキストを提供している媒体装置の仕掛けがまったく異質のものであれば、また、その読み方の相違があれば、テキストの意味の捉え方、理解や解釈の仕方もまた異なるものだという媒介作用を指摘しているわけである。

簡潔に言えば、「テキストの世界」と「読者の世界」を取り結ぶブリッジの役割を担う、ないしは、「解釈の対象となるように提示する装置」の「形態が意味を生む」のであり、さらに、第2の公準に関しては、読み手が「そのテキストを受けとめるときの形式、ないし形態」、つまりは、「読む」ときの姿勢や場所や癖などのなかにも「読む」という行為を成り立たせ、かつ、「理解」の仕方を規定する要因が潜んでいるとも指摘する。確かに、新聞を「読む」という行為の際にも、自宅のソファに座ってゆったりとした姿勢で「読む」場合と、電車の中で「読む」場合等々、多様であり、それぞれの「読む」という行為がもたらす理解や記憶の仕方は異なるものであるだろう。昨今の実情に即していえば、仮に、携帯電話が提

供するニュース・テキストを「読む」場合においても、それを用いるときの姿勢や場所や癖等々、その他諸々の要素が理解の仕方に介在してくるというのである。

かくして、シャルチエの方法意識の中心は、従来のテキスト研究にありがちであった、テキストに内在する意味解釈論の次元に終始するのではなく、「解釈の対象となるように提示する装置」、すなわち、メディアの伝達様式の特異性の次元に目を向けることにある。その上で、「テキストの内容を構成する情報の意味解釈の次元」と「個別メディアの伝達様式の特異性の次元」を峻別し、前者を〈情報の次元〉、後者を〈伝達の次元〉と位置づけ、この2つの次元の絡み合いにこそ、メディアの媒介作用を分析する際の中心課題があるというのである。

この絡み合いに関して、社会学者の北田暁大は、ニクラス・ルーマンを引き合いに出しながら次のような視点を提示している。

#### 4. 〈情報の次元〉と〈伝達の次元〉

「読む」という行為をめぐるシャルチエの提起する2つの次元、「情報の意味解釈の次元」と「メディアによる伝達様式の次元」の区別に関し、北田は、前者は「なにがWhat伝えられるか＝情報の次元」、後者は「いかにしてHow伝えられるか＝伝達の次元」と捉え直し、この2つの次元の絡み合いの進展にこそコミュニケーションの本質的な問題が潜在するというもう1人の論者、ルーマンのコミュニケーション理論との接合を試みる。すなわち、新聞という印刷物であっても電子メディアのような物理的な装置であっても、〈伝達の次元〉と〈情報の次元〉の絡み合い、とりわけ、〈伝達の次元〉の〈情報の次元〉への作用関係（「形態が意味を生む」メカニズム）は、メディア・コミュニケーションにおいては、対面的コミュニケーションの場合以上に明示化されるという<sup>11)</sup>。

つまり、シャルチエの提起した2つの次元に関していえば、対面的な状況のなかでは、伝達様式

（の次元）と情報内容（の次元）の差異を考える時間的余裕はまったくないなかでコミュニケーションが進んでいく。しかし、メディア・コミュニケーションにおいては、伝達様式（の次元）と情報内容（の次元）の差異を受け手自身が観察する時間的スパンが得られる。そのために、「情報内容そのものとその情報を伝達するのに適した形式に関する情報という『情報の二重化』が明確になってしまい<sup>12)</sup>、受け手はその二重化を「観察」という行為が「読む」という行為のなかに入り込んでくることになる。それゆえに、情報内容の受け手は、同時に伝達様式との間に存在する「差異の観察者」でもあり、「受け手（観察者）の看取する『意味』は、まずその受け手が自らの立ち会っている情報の伝達様式へのメタレベルでの意味づけによって枠づけされるのであり、おそらくは、マーク・ポスターが『情報様式』と呼んだ、受容のコンテキストのあり方がメディア・コミュニケーションにおいては問題化されてくる<sup>13)</sup>という理論的経緯を展開する。

このような北田による分析体系の土台には、ルーマンのコミュニケーション論が控えている点については先に述べた。その概略を整理しておくなら、ルーマンによれば、コミュニケーションとは、ある情報の選択（①）、その情報の伝達のあり方についての選択（②）、受け手による①と②の差異の観察＝理解の選択（③）という3つの選択の不可分の統一体であり、この統一体としてのコミュニケーションが、社会システムの構成単位であるとする<sup>14)</sup>。そして、実際のコミュニケーションにおいて重要なことは、受け手による①と②の「差異の観察＝理解の選択」があって、初めて、その「理解」に先行する行為の意味が獲得されると考える点にある。すなわち言い換えれば、「送り手」の側の選択である①②といった「伝達それ自体は、さしあたりなんらかの選択の提示」にすぎず、それに対する応答としての③の「理解」があってこそ、コミュニケーションが完結することになる。その意味では、コミュニケーションにおいて一義的に重視すべきは、「情報」の意味論的内容自体を問題視する〈情報の次元〉より

も、その情報を伝達する意図の提示としての〈伝達の次元〉にこそある、というのがルーマン・コミュニケーション論の要諦であった。

このようにみえてくると、結局、コミュニケーションとは〈情報／伝達（様式）—差異観察の継起〉として捉えることができ、それゆえ、「受け手」は受け手の立場にとどまらず、情報と伝達の差異の「観察者」としても出現するというのが北田の主張となる。この一連の過程において、「伝達次元の一次的性格」は、対面的状況よりもメディア・コミュニケーションにおいてよりその重要性を高めることになるのである。

以上に、ルーマンのコミュニケーション論に依拠しながら、情報の意味論的解釈というものが、純粋に、解釈過程のみにおいて成り立つものではなく、情報を伝達する様式との絡み合い（差異の観察）のなかで成り立ち、伝達次元の問題を重視する見方は、先にみたシャルチエの「読む」行為論の分析視点と重なるところが大きいとみることができる。いってみれば、シャルチエに続いてルーマンも同じく、「形態が意味を算出する」と指摘しているのであり、この2人にみるテキストと読み手の関係の枠組は、北田も指摘するように、かつてのマーシャル・マクルーハンの有名な命題、「メディアはメッセージである」という論法のより緻密な展開とみることもできるのである。言い換えれば、メディアの差異性とテキストの同一性という現象のなかでのメディアの媒介作用のメカニズムを、期せずしてシャルチエやルーマンが明らかにしていると考えることができる。

## 5. エピソード性から普遍性へ

さて、以上の文脈における要点は、活字文字であろうとデジタル文字であろうと、文字を「読む」という行為の展開のなかで、テキストに込められた情報の意味論的解釈のプロセスというものは、単純に解釈過程のみにおいて成立するものではなく、情報を伝達する様式との絡み合いのなかで成り立つということ、つまりは、コミュニケーション過程における〈伝達次元〉の問題を〈情報

次元〉より重視する視座に求めることができる。この論理構成をシャルチエは「形態が意味を生む」と呼んだわけであるが、まさに、「形態が意味を生む」にいたるメカニズムに関して、その実例といってもよい研究成果が意外な分野から提出されている。脳科学者茂木健一郎の所論である。

茂木によれば、そもそも「読む」という行為には「根源的な仮想の自由が内在している」とし、メディアの差異性とテキストの同一性の検討にあたって、「なぜ、自筆原稿を読むよりも、活字となったものを読む方が、文学的体験として純粋なものが立ち上がるように思われるのか」<sup>15)</sup>という問題を提起する。

この問題の考察に関して、茂木は、漱石の小説『それから』の自筆原稿を見たときの体験を掘り起こし、活字となった文章で『それから』を読んだときの体験との差異を次のように論じている。すなわち、「自筆原稿には（ところどころに後から朱を入れて文章を付け加えるなど—筆者）創作過程の秘密だけでなく、漱石その人の筆跡の持つ何とも言えない風合いのようなものが現われている」。「それにも関わらず、『それから』という文学作品の体験としては、自筆原稿を「読む」よりも、活字になった文章を「読む」行為の方が純粋であるように思われる。代助という架空の人物の内面の物語という仮想的表象が、活字となった文章で「読む」方が、漱石その人の風合いが伝わってくる自筆原稿を「読む」よりも、むしろ鮮明に心の中に立ち上がるように感じられる」<sup>16)</sup>。

そのメカニズムを解明するに際し、茂木は、脳科学者らしく、言葉の意味が脳に記憶されていく過程に関する従来の知見を総合し、「言葉の意味の獲得のプロセスと、脳の中でエピソード記憶が次第に意味記憶へ移行していくプロセスは深く関係している」<sup>17)</sup>と述べる。脳科学でいうエピソード記憶とは、過去の具体的な出来事の記憶であり、意味記憶とは、具体性から抽象化されたレベルでの概念の意味の記憶を指す。人間の脳の中では、「エピソード記憶が次第に意味記憶に整理されていくという形での記憶の変容」が起こり、この過程で、個々の言葉の意味が、「エピソードの



個別性を超えた普遍性を獲得して初めて言葉」として記憶されていく。確かに、子どもが生まれ落ちてから言語能力を習得していく過程においては、初めから言葉の意味を理解して脳に記憶されていくとは常識的にも考えることはできない。周囲の大人たちとの接触を通じたエピソード的な体験の積み重ねのなかから、次第にその言葉の意味が明示的に記憶されていくと考えるべきであろう<sup>18)</sup>。

したがって、言葉というものは、「エピソードの個別性に依拠しない形で表象されてこそ初めてその普遍的意味を全うする」という本性を有している。活字は、「このような、特定の文脈、状況に依存しない、抽象的、普遍的な志向の対象としての言葉の意味を喚起するためのメディアとして優れている。それに比して、手書きの文字は、その人物の人となり、パーソナリティを喚起させるという点で、言葉が本来持つ抽象性、普遍性に不純なものを混入させてしまう」<sup>19)</sup>。

こうして、茂木は、言葉というものは、個別の体験の普遍化の賜物であり、とりわけ、活字として刻印された「文字を通して本を読むということは、すなわち、そのような普遍化の運動に自らも巻き込まれるということを意味する。自筆原稿は、時に、あまりにも強いエピソード性を喚起する点において、言語が志向している普遍化への運動を妨げてしまう」<sup>20)</sup>と指摘する。文学にしても、社会科学・人文科学の論文であろうと、その作品がひとつの普遍性を獲得するためには、書き手の具体的な体験のエピソード性を離れなければならない。「そのような普遍性を表現するのに適したメディアは、一見没个性的に見える活字なのだ」。

かくて、自筆原稿という「形態が意味を生む」メカニズムと、活字文字という「形態が意味を生む」メカニズムに関する茂木の論述をみてきたが、そもそも「読む」という行為には「根源的な仮想の自由が内在している」という当初の指摘に戻れば、活字文字を「読む」場合において、「仮想の自由」の幅は最も大きくなると解することができよう。では、電子メディアにおいては、果たして、「仮想の自由」はどのような形で内在して

いるといえるのであろうか。

## 6. 電子メディアと「仮想の自由」

結論を先取りして言えば、筆者は、電子メディアにおける「仮想の自由」については、活字文字を上回ることはできないとの思いが強い。茂木の言うように、活字というものが、言葉の本質としての普遍性への志向を内包するメディアであり、「読む」という行為を通して、読み手を言葉のもつ普遍化への運動に巻き込むものであるとすれば、それと同じような普遍化への作用を、デジタル文字、つまりは、先に述べた文字テキストの4分類のうちとりわけ〈象限B〉のテキストは可能にしてくれるものであろうか。現状のところ、答えは否と言わざるを得ないのであるが、その理由に関して、大澤真幸の電子メディア論は1つの説明根拠を提示している。

大澤のいささか晦渋な電子メディア論の出発点は、カントの自我論におかれている。すなわち、近代において人間が認識の主体であるためには、経験的認識に統一性を与える作用がどうしても必要であり、経験的認識の間に総合的統一性をもたらす作用がはたらいてこそ自己意識の同一性が保証される、とカントは考えたのであった。カントは多様な認識に統一性を与える作用を「統覚」と呼び、この統覚が「経験の普遍的な可能性そのものを構成する」と位置づけた<sup>22)</sup>。

そこで、マルチメディアの登場になるわけであるが、マルチメディアは、周知のように、大量の情報を瞬時に探査することを可能とし、かつ、コンピュータの高速化にともなって情報の収拾（知覚）とほとんど同時に認識の統一性を図るための統覚的な操作をも可能としてくれるメディアである。それゆえ、人間の認識にとってマルチメディアの支援を受けた場合は、統覚的な作用による経験の普遍的な構成がより促進され、自己意識の同一性の確立に裨益するところ大、と考えることができるというのである。その結果、「マルチメディアによる技術は、カントのいう「超越論的統覚」を、個人と共同体の両方の水準において、ほ



とんど純粹状態で確保するもの」となり、近代が自らを定義づける「主体性」を現実化するものとなる、というのがさしあたってのマルチメディアの理念であると大澤はいう<sup>23)</sup>。

ここまでの文脈は、マルチメディアの技術論的な特性とカント自我論との接合でしかないが、次に大澤は、電子メディアのメッセージ性に目を向ける。いわゆるメディアのメッセージ性とは、マクルーハンの「メディアはメッセージである」という命題、また、本稿の「メディアの差異性とテキストの同一性」という問題設定に関わるものであるが、その意味するところは、「同じメッセージであれば、それが印刷媒体によって表現されていようと、テレビの画像によって表現されていようと、どちらでもよい」と考えるのは間違いであって、「どんなメディアが採用されているかということが、そこに表示されているメッセージとは独立に、固有に、身体に作用する」のであり、その「固有に身体に作用する」側面こそメディアのメッセージ性にほかならない<sup>24)</sup>。だとすれば、電子メディアの場合に、その固有のメッセージ性をどのように措定すればよいのか。この問題について、大澤は電子メディアが提起するメッセージ性とは、「自他関係についての特殊な混乱にある」として以下のようなロジックを展開する。

すなわち、電子メディアの技術的な特性とは、先にも若干触れたように、時間軸、空間軸のそれぞれに沿って備わっており、時間軸からみれば、それは、「伝達速度の極限的な上昇をもたらす装置」であり、空間軸からみれば、電子メディアは、「伝達される情報の極度の拡散性」によって特徴づけられるものであった。この技術特性を踏まえて、実際に電子メディアを利用する際には、「必然的に伝達の相手——典型的には他者——を、端的に、現前しない遠隔の存在者として定位していること」になる<sup>25)</sup>。これに続いて、大澤の言うところを少し長いが以下に引用する。

「物理的な現前／非現前の差異は、一般には、伝達時間の落差として検出される。ところが、電子メディアによる伝達速度の上昇は、この対応関係を壊してしまう。それは、現前しない遠隔の他

者からの——あるいは他者への——伝達を、(物理的に)現前している親密な他者からの伝達を特徴づけるような直接性において、実現するわけだ。現前している他者とは、典型的には、自己(私)の領域に所属している他者、自己と同調している他者、自己がほとんど同化しているような他者である。それゆえ、電子メディアを利用するという行為は、いったん他者を、まさに他者的なものとして、つまり、遠隔の存在として措定しつつ、同時に、自己の領域の内部へと固有化することを含意している。」<sup>26)</sup>

こうして、電子メディアを利用する際、電子メディアを媒介にして関与する限りでの他者は、「直接に現前する他者とも、また端的に遠くにいるだけの他者とも違う、独自の他者として現れざるをえないわけだ。(中略)他者の直接性の程度が高められれば、それは、やがて、自己自身とそのまま等置されるところまで来るにちがいない」<sup>27)</sup>と大澤は述べる。そしてさらに、このような電子メディアを利用しているときに生じる自他関係の混乱、つまりは、自己性と他者性についての交錯は、一人でコンピュータを使ったり、ワープロを使用しているような場合でも生じる。「いずれにせよ、電子メディアは、目標となっている事物を一方では遠隔の対象として措定しつつ、他方では、自己にとって身近な対象としても現象させる」からである<sup>28)</sup>。

結局、電子メディアは、単なる機械にすぎないと言えばその通りであるが、その利用のプロセスにおいては、「さまざまな言語ゲームに参入したり離脱したりする可能性」をもつ機械、言い換えれば、一種の「他者」として利用者に対峙するものとして現れ、結果的に、「われわれは電子メディアの使用に没入しているとき、メディアに対して、端的な事物に向かうように接することはむずかしく、それが、さながら「魂」の原始的な形態であるかのように接してしまう」<sup>29)</sup>。ここに、電子メディア固有の身体への作用があるわけである。

電子メディアの、まさにメディアとしてのメッセージ性が「自他関係の混乱」ないし「魂の原始

的な形態」として現われるが故の「他者性」にあるとするなら、すでに指摘するまでもないが、近代の個人としての主体性を構築するためのカントのいう「統覚」の作用を電子メディアが支援するという理念は到底現実的なものとはいえない。さらに、自他関係の混乱のなかでは、経験の普遍的な構成による自己意識の同一性を保証することもまた不可能とみるべきであり、逆に、時にして、自己を見失う事態にさえ誘う可能性もなしとしない。先述の茂木の提言に即していえば、活字というメディアに匹敵する「根源的な仮想の自由」もまた限定的とみなさなければならない。電子メディアは、事物でありながら、利用者にとっては何よりも言語ゲームにおける「他者」なのである<sup>30)</sup>。

## 結語

以上、今日における「読む」という行為の変容に思考の水準を据えながら、メディアの差異性とテキストの同一性という事象のなかでの若干の基本的問題を考察してきた。そこで明らかになったことは、そもそも活字というメディアのメッセージ性なるものが「普遍性への志向」というキーワードに集約され、「手書き文字」の「個性性」に対峙するものであること、電子メディアの場合には、原理的に「他者性」というメッセージ性とその特徴があることは不可避であること等について、その論点を整理してきた。

こうした問題領域の先達の成果をフォローしてみると、現代の脳科学の知見を踏まえて展開される「読む」という行為についての論理構成もまた、歴史学者シャルチエや理論社会学者ルーマンの議論に近接するものであった。いずれも、情報の意味解釈、つまりは、文字を「読む」という行為の展開過程においては、その文字を伝達する様式や形態との絡み合いが重要であり、また、メディアの差異性とテキストの同一性という副題に即していえば、同じ内容の文字テキストを「読む」としても、結果として全く同じ意味解釈に至るというプロセスを想定することはできない、情

報（文字）の伝達の様式によって微妙に異なる、という社会的事実を主張するものであった。その差異のなかに個別メディアの固有の媒介作用が存するわけである。

こうした理論的背景にもとづいて、本稿では、活字文字を「読む」場合とデジタル文字を「読む」場合において、具体的には活字媒体と電子媒体の、2つのメディアの媒介作用に立ち入る作業を試みたが、しかし、現在、電子媒体が提示しているデジタル文字の群れは、活字文字のようにその文体的側面において一様ではない。そのため、本文【図1】に示したように、「書かれるようにして書かれた文体」と「語るようにして書かれた文体」の軸を設けて、4つの象限に分かれる文字テキストの分類化を試みたのであった。この4つの文字テキストの表現形式に応じて、とりわけ、スタイルの差異から生じる「語るようにして書かれた文体」の内包する問題点、その問題点によって、人びとの認識のあり方や思考過程はどのような規定を受けるのかという主題、それらのさらなる検討は今後の課題とせざるをえない。そして最後に触れておきたいのは、この種の課題を歴史的に検討したオングの名著『「声の文化」と「文字の文化」』にみえるかれのコミュニケーション論が、意外というべきか、ルーマンの主張するコミュニケーション論の核心と極めて類似しているという事実である。

周知のように、ルーマンは、従来のコミュニケーション論の大勢を占めてきた「移転のメタファー」を排斥する。その理由の一つは、送り手が、情報を受け手に伝えるとき、「送り手自身は何かを失うという意味で受け手に何かを手渡してはいない」のであって、手渡したはずの情報は依然として送り手の所有に属しているのである。もう一つの理由は、「移転のメタファー」は、受け手は、送り手からの情報だけで理解すると考えがちであるが、実際のコミュニケーションでは、受け手は、送り手からの情報だけを頼りに理解するのではなく、送り手の伝達行動からも理解が構成される。すなわち、先にも述べたように、受け手は、送り手からの情報とその伝達行動（様式）と

の差異の観察からある特定の「理解の選択」に到達するのである<sup>31)</sup>。

ルーマンが「移転のメタファー」を排斥する理由は他にもいくつか存するが、この第1の理由に関連して、オングもまた次のように述べる。「(メディアあるいはメディウムを想定した一筆者) コミュニケーションとは、「情報」と呼ばれる材料の何単位かを、ある場所から他の場所へとパイプラインのようなもので輸送することである、という考えを暗に含んでいる。(中略) このモデルは、人間的なコミュニケーションとあるかわりをもつように見えるが、しかしよく見ると、じつはほとんどかわりがないと言ってもよく、コミュニケーションという〔人間の〕行為を、原型をとどめぬほどに歪めている」<sup>32)</sup>。オングもまた、ルーマンの指摘する「移転のメタファー」は、人間的なコミュニケーションを歪めるものとして排斥しているのである。

では、オングにとって、人間的なコミュニケーションの原型とはどのように捉えられているのだろうか。この点に関してオングは、「つまり、人間的なコミュニケーションは、そもそもそれが成立するためには、〔相手の立場を〕先取りするようなフィードバックを必要としている点である。メディウム・モデル（ルーマンのいう「移転のメタファー」-筆者）では、メッセージは、送り手の側から受け手の側へと移動する。〔それに対し〕現実の人間的なコミュニケーションにおいては、送り手は、そもそもなにかを送りうるまえに、送り手の立場ばかりではなく、受け手の立場にも立っていないなければならないのである」<sup>33)</sup>と述べている。このオングの指摘にある、「送り手は、なにかを送りうるまえに、送り手の立場ばかりではなく、受け手の立場にも立っていない」という記述は、ルーマンが「移転のメタファー」を排斥する第2の理由、すなわち、情報と伝達行動の差異の観察に内包されるファクターとして捉えることができるであろう。

このように、シャルチエとルーマン、また、ルーマンとオングは、いずれも、コミュニケーション論の方向性において同一の視点を共有して

いるかのようにみえる。本稿での、「読む」という行為の分析から析出されたこれら幾つかの理論的類似性に関しては改めて別稿に委ねることとしたい。

- 
- 1) 北沢方邦によれば、日本語の古語「ヨム」という言葉はほぼ次の二つの意味を包含していた。ひとつは、〈情勢を読む〉〈天候を読む〉等の用法のように、「状勢や様相を特定の時空のなかで判断することをいう」場合。他は、「人間がみずからの思いや情緒をコトバにし、声にすること」をいう場合。「歌をヨム」はその事例であり、後に「詠む」という漢字が当てられることになったが、「第1の意味のヨムは、人間がかかわるものから自然や宇宙にいたる、すべての事物や現象の時空的な変化を読みとることであり、人間の外に存在するものの記号的解読であった。第2の意味のヨムは、それらに触発されて人間の内面に湧きあがる思い、つまり同じ古語でいえば、ア・ハレあるいはモノノアハレを言語記号によってうたうことであり、両者は不可分に記号の宇宙を形成してきた」という。さらに、後年の漢字ならびに仮名の発明にともなう〈書かれたもの〉の普及の結果、「ヨム」の語に「文字の解読の意味」が加えられ、ついには近代化とともに、「これがすべてに優先するにいたった」と述べている（北沢方邦 2003 「構造を読む」・『環』第14号特集：読むとは何か、藤原書店）。

- 2) Ong, W-J. 1982 *Orality and Literacy : The Technologizing of the World*, Methuen & Co., Ltd. = 1991 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『「声の文化」と「文字の文化」』藤原書店。

- 3) Barthes, Roland 1953 *Le Degre Zero de L'écriture*, Editions du Seuil. = 1971 渡辺淳・沢村昂一訳『零度のエクリチュール』みすず書房。なお、内田樹著『寝ながら学べる構造主義』（文藝春秋、平成14年）の解説が

分かりやすい。

- 4) 因みに、日本新聞協会「全国メディア接触・評価調査」(2007年)によれば、15～19歳層の場合、新聞に毎日接触している割合は36.9%、インターネットに毎日接触している割合は66.5%であった。
- 5) 新聞ニュースとネットニュースにおけるテキストの同一性が齎された結果、近年、ニュース研究の勢いが増している。中島紗由理・坂本章「メディアの違いがニュース記事の記憶に及ぼす影響」(『社会情報学研究』第15巻1号所収、2011年)もその一つであるが、実験心理学の観点からの研究であるため、「テキストの同一性」に関する厳密な条件整備に力点が置かれてリアリティが喪われる内容となっている。
- 6) Certeau, Michel de 1980 *Art de Faire*, Union Generale d'Edition. = 1987 山田登世子訳『日常実践のポイエティック』国文社、p. 335。
- 7) Chartier, Roger 1992 福井憲彦訳『読書の文化史』、pp. 2-3。
- 8) シャルチエ, R. 前掲書、p. 3。
- 9) シャルチエ, R. 前掲書、p. 3。江戸から明治にかけての庶民の「読む」という行為を詳細に分析した前田愛は、名著『近代読者の成立』(岩波現代文庫、2001年)の扉にサルトルの次の一文を引用している。「創造は読者のなかでしか完成しない。芸術家は自分のはじめた仕事を完成する配慮を他人に任せなければならないし、読者の意識を通じてしか、自分を作品に本質的なものと考えることができない。従って、あらゆる文学作品は呼びかけ (appel) である。書くとは、言語を手段として私が企てた発見を客観的な存在にしてくれるように、読者に呼びかけることである」(サルトル『文学とは何か』加藤周一訳)。このサルトルの指摘は、文学研究におけるテキストの位置づけに関してはもっとも説得的なものではないかと思われる。シャルチエの歴史社会学的な立場と異なることは明

らかである。なお、文学研究の領域においてもシャルチエの立場からのテキスト研究も少なくない。その一人、フランス文学者の清水徹は、「ちょうどわたしたちの精神がわたしたちの身体に内在し、身体から発現するものであるように、テキストがテキストの力として発現するのは、物体としての書物からである」との視点から書物論を展開している(清水徹『書物について—その形而下学と形而上学』岩波書店、p. 3)。

- 10) Chartier, Roger 1985 *Pratiques de La Lecture*, Edition Rivages. = 1992 水林章・泉利明・露崎俊和訳『書物から読者へ』みすず書房、p. 89。
- 11) 北田暁大 2004『〈意味〉への抗い——メディアエーションの文化政治学』せりか書房、p. 28。
- 12) 北田、前掲書、p. 37。
- 13) 北田、前掲書、p. 34。
- 14) Luhmann, Niklas 1984 *Soziale Systeme. Grundriß einer Allgemeinen Theorie.*, Suhrkamp Verlag. = 1993 佐藤勉監訳『社会システム理論 (上)』恒星社厚生閣、pp. 217-227。
- 15) McLuhan, Marshall 1964 *Understanding Media : The Extensions of Man.* = 1987 栗原裕・河本伸聖訳『メディア論』みすず書房。
- 16) 茂木健一郎 2003「読むという純粹体験」・『環』第14号特集：「読む」とは何か、藤原書店、p. 182。
- 17) 茂木、前掲論文、p. 183。
- 18) 茂木、前掲論文、p. 184。
- 19) 生まれて間もない子供にとって、「ことばは、どのようなすじみちをたどって生まれてくるのであろうか」という問題を考察した熊野純彦は、乳児の泣き声はひとつの欠如から生じ、生理的な充足と制御の手段としてやがてことばの誕生を準備するようにみえる。しかし、ことばが生まれていく条件を考えると、「ことばに先立つ交流のかたち、生理的な要求とは隔てられたやりとりの形式」に



注目する必要があると述べ、母子の間では、「言語的な交流それ自体の最小の形式が、非言語的な次元で先行的に形成されているように思われる。伝えるべき内容の獲得に先だって、伝達の形式が習得される」ことに注意を促している。ここでも、人間のコミュニケーションというものは、その原初的な成り立ちからみても、〈情報の次元〉よりも〈伝達の次元〉の方が優先するものと考えられているものといえよう。(熊野純彦「ことばが生まれる場へ」・岩波講座『現代社会学5 (知の社会学／言語の社会学)』岩波書店、1996年 pp. 67-88。)

- 20) 茂木、前掲論文、p. 185。
- 21) 茂木、前掲論文、p. 186。
- 22) 大澤真幸 1995『電子メディア論—身体のメディアの変容』新曜社、pp. 14-18。
- 23) 大澤、前掲書、p. 19。
- 24) 大澤、前掲書、p. 80。
- 25) 大澤、前掲書、p. 74-75。
- 26) 大澤、前掲書、p. 76。
- 27) 大澤、前掲書、p. 76。
- 28) 大澤、前掲書、p. 315。
- 29) 大澤、前掲書、p. 81-82。
- 30) ここで、「仮想の自由」について敷衍しておきたい。茂木のいう「仮想の自由」とは、本文でも触れたように、「文章を『読む』場合に、読み手の思うままに心の中に立ち上がってくる仮想的表象 (イメージ)」を指す。い

わゆる電子メディアに付きまとう「仮想現実」の「仮想」でないことは言うまでもない。書物を「読む」という行為を通じて立ち上がってくる「仮想的表象」については、立場は異なるが社会学者の内田義彦が「二通りの読み方」として、「情報として読む」場合と「古典として読む」場合に区分し、後者について次のように指摘するところと一脈相通じる部分がある。すなわち、「新しい情報を得るという意味では役立たないかもしれないが、情報を見る眼の構造を変え、情報の受け取り方、何がそもそも有益な情報か、有益なるものの考え方、求め方を——生き方をも含めて——変える。変えるといつて悪ければ新しくする。新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかには新鮮な風景として身を囲み、せまってくる、というような『読み』がある」(内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985、pp. 12-13)。この内田のいう「古典としての読み」と茂木のいう「仮想の自由」とを重ね合わせて理解することも左程無理のないことと思う。

- 31) ルーマン、N. 前掲書、pp. 217-220。また、村中知子 1996『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣、pp. 135-140を参照。
- 32) オング、W-J. 前掲書、p. 357。
- 33) オング、W-J. 前掲書、p. 358。

## **In the Network Society “Reading” of the Act of Transformation —Differences Over the Identity of Texts and Media**

MAENO HIROMU

*School of Social Information Studies*

### **Abstract**

This paper is about modern day network society which focuses on the transformational act of “reading.” In the modern “reading” act, more opportunities are available to read various digital texts through different forms of media rather than just printed material. The effect of giving the reader more options will allow better comprehension and understanding. In this regard, Walter J. Ong, Niklas Luhman and others offer us a “one-dimensional” focus based on the preface of Roger Chartier. In addition, the nature of this transfer dimension is also highlighted.

### **Key Words** (キーワード)

Act of reading (読むという行為), Media (メディア), Texts (テキスト), Print-texts (活字文字), Digital-texts (デジタル文字), information and communication (情報と伝達)